第七回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

東洋大学文学部印度哲学科　李　焌　秀
（韓　国）

人間はこの世に偶然に生まれてきたのではないと私は思う。また神の命ずるところにしたがって生まれてきたのでもなく、といって運命として定められていたのでもない。仏教はこれらを無因無縁論・尊祐論・宿命造論としてしりぞけ、むしろ業論・行為論・努力論を主唱した。

簡単にいうと、人間はこの世に自分の意思によって生まれてきた、というのである。

したがって自分の行動については、自分で責任をもたなければならない、というのが仏教の人生観の基本である。

これは前世からこの世に生まれてくるという、大きなタイムスパンでの議論であるが、これを日常生活に適用すると、幸福になるのもならないのも本人の意思次第・行為次第ということになる。たしかに両親や友人たちなどのまわりの人たちから影響も受けるであろうし、政治や経済といった社会の情勢によって翻弄される

ということもあろう。しかし両親や友人たちからの影響は、結局主体的には自分が受けとめているわけであり、社会の情勢も自分を含めた多くの人々の意思によって動かされているのであって、決して社会が一方的に自分を規定しているわけではない。

人間は自分で幸福になろうと思い、そのように行動すれば、幸福になれる可能性は大きい。

これは自然現象でも同じであって、樹木を伐採してあとに植栽をしなければ当然のことながら禿山となって、ちょっとした雨で山崩れをおこす。工場廃水をたれ流せば死の海となって魚も住まない。フロンガスを野放しにするとオゾン層を破壊して人体に悪影響を及ぼす。人間が生み出す多量の煙やほこりの放出や熱帯雨林の破壊は地球の気候をも変えてしまう。要するにこれらは自然の摂理などではなく、人間の行った悪行の結果なのである。

このように自然や気候でさえも、私を含む全世界の人々の営みによって動いているのであり、それらは一に私たちの意思や行動にかかっているといってよいのである。

このように、この世に生まれてき、幸せとなり、よりよい社会をつくり、快適な自然環境を保つか否かは、すべて私達の意思と行動によるのである。これは業の思想であると思う。

縁起は永遠不変のダルマ理法であるとともに、初期仏教や阿毘達磨仏教では、縁起は現実の迷いの世界の成り立ちを説明するものである。

とするならば、業は縁起の一部分なのであるから、結局のところ業思想は、この迷いとしての現実の生活のありよう（行為）を説いたものである。しかしながら行為を善とか悪とかに分類するのは、所詮分別の所産であって、決してさとりとしての無分別智の世界のものではないことを忘れてはならない。

試みに何が善で、何が悪かということを考えてみよう。哲学辞典をひもといてみると、善は『一般にわれわれにとって価値あるもの、貴重なもの、有利なものをいう。悪の反対。たとえば、このような性質をもつ個々の行為、意志、人間、制度などはみな「善」にかぞえられる』とされている。当然のことながら悪はこの反対の記述がなされている。

社会体制や時代や国、あるいは宗教や信条によって大きく左右されることは容易に推測されるであろう。要するに善や悪は、このようなあやふやな基準しかもたない。現実的でごく相対的な概念であることは明らかである。仏教のさとりはこのような相対的分別をこえて、「あるがまま」を「あるがまま」に見るところにあり、したがって善悪の彼岸にあるものでなければならない。

ところが業の思想は、こうした善悪といった相対的規範を当為の目途にするのであるから、当然のことながら現実の迷いの世界における行為論・努力論としての一応の目標にしかすぎないのである。

ところが無分別智を得ていない私たち衆生は五取蘊と把握され、私たちの行う肉体的活動も精神的活動もすべてすでに煩悩に影響されていないものはない。したがって私たち凡夫の行う行為はたとえ善であるとはいえ煩悩に影響されていないものはない。そこで私たち凡夫の行う善を「有漏善」と呼ぶのである。これに対して煩悩に影響されていない善を「無漏善」と呼ぶが、これは無分別智を獲得した聖者にしかしえないものである。

要するに分別智をもととして判断する善悪は、多かれ少なかれ利害得失を前提にしたもの以外ではないのである。縁起説は仏教の核心的な思想である。実存主義哲学者のサルトルのアンガジューマン理論とか、科学者のアインシュタインの相対性理論は縁起説と同じ思想であると思う。

未来社会の仏教は、もっと生産的で、もっと進取的なものを志向しなければならない。また、未来社会が必要とする哲学があるとしたら、それは縁起説による調和の哲学であると私は思う。

仏教の縁起説の調和思想は世界のどの宗教、どの哲学にもない偉大な思想である。縁起説の世界平和を実現させるためには、仏教を世界にもっと広く知らせることが必要であろう。

私は仏教を勉強して、物質文明の中で生きて行くすべての現代人に仏教の偉大な教えを限りなく伝えたいと思う。